

# 1. エコロジカルな回心とは ——Ecological Conversion？

・エコロジカルな回心は、「神がわたしたち男女」に「託された」「世界」と「それ自体たまものであって、さまざまな質低下から守られねばならない」「人間の生」とを「守り改善」しようとする「努力」、「十全な人格尊重を前提とし、「『ライフスタイルや生産と消費のモデル、そして今の社会を支配している既成の権力構造』における大きな変化を」も含意する「真のヒューマン・エコロジーのための道徳的条件を保護する」「努力」、「わたしたちを取り巻く世界のことを気にかかけ」、「個々の存在物の本性を、そして秩序ある存在体系の中での存在物相互の間関係の本性を考慮」しつつ、「存在するものすべてが神からのたまものであることを心に留めながら、生かされねばならない」「現実を変容させる人間の能力」を生かす「真の人的発展」に向かう「地球規模」の「道徳的な性質をも」つ「努力」を牽引する恵みの働きです。（LS 5 参照）

・エコロジカルな回心は、「現実主義や実用主義にかこつけて、環境への関心を嘲笑し」たり、「自分の習慣を変えようとしなない」、「消極的」で「一貫性に欠け」たりする「人々皆に必要」な、「生態学的危機」によって「召喚」される「心からの回心」であり、「イエス・キリストとの出会いがもたらすものを周りの世界とのかかわりの中であかしさせ」、「徳のある生活」に「欠かせ」ず「キリスト者としての経験にとって任意の、あるいは副次的な要素で」ない「神の作品の保護者たれ、との召命を生き」させてくれる恵みの働きです。（LS 217 参照）

・エコロジカルな回心は、「全人格に及ぶ」「心の変革」であり、「過ち、罪、落ち度、失敗に気づき、心からの悔い改めと、変わりたいという強い望みへと導」き、「自分たちの生活を吟味し、行いや怠りによって神のものである被造界を傷つけてきたことを認め」させ、「被造界との健全なかかわり」を追求させて、「被造界との和解を果た」させる恵みの働きです。（LS 218 参照）

・エコロジカルな回心は、「永続的な変化をもたらすために必要」な「共同体の回心」でもあり、「社会的あるいはエコロジカルな自覚を妨げてしまう非倫理的な消費主義の餌食にな」らないよう、「功利主義的な考え方を避けるための力と自由とを」保たせ強めてくれる恵みの働きです。（LS 219 参照）

・エコロジカルな回心は、「優しさあふれる、惜しみない気遣いの精神を培ってくれるさまざまな態度」を求め、「感謝の念と見返りを求めない心」を伴い、「世界は愛のこもった神の贈り物であるということと、自己犠牲と善行を通して神の惜しみない心に倣うようそっと呼びかけられているということの認識」を含み、「わたしたちは他の被造物から切り離されているのではなく、万物の

すばらしい交わりである宇宙の中で、他のものとともにはぐくまれるのだということ、愛をもって自覚させ、「信仰者として」「御父が存在するすべてのものとわたしたちを結んでくださったきずなを意識しながら、外部からではなく内部から世界を見」させてくれ、「各信者」に「神からそれぞれ授かった固有の能力を伸ばすことを通して世界の諸問題を解決し、神に『喜ばれる聖なる生けるいけにえとして』（ローマ 12・1）自分をささげることができるよう、豊かな創造性と熱意を注いでくれ、「自分たち人間が優れたものとされていることを、個人の名誉や無責任な支配の根拠としてではなく、むしろ、信仰に由来する重大な責任を伴う、他とは異なる能力として理解」させてくれる恵みの働きです。（LS 220 参照）

・エコロジカルな回心は、「個々の被造物が神に属する何かを映し出しており、わたしたちに届けられるべき何らかのメッセージを有しているという気づき」と「この物質界をその身に受けたキリストは、復活した後、今なお、存在するすべてのものをご自分の愛で包み、その光をもってそれぞれの内部に入り、すべてのものに対して親密な存在でおられるという安心感」そして「神は、秩序とダイナミズム—人間にこれを無視する権利はありません—を書き込みながら世界を創造なさったという認識」から成り、「アッシジの聖フランシスコがどのように輝かしく体現した、全被造物との、あの高潔な兄弟愛をはぐく」んでくれる地味豊かな恵みの働きです。（LS 221 参照）

## 2. インテグラル・エコロジーとは ——integral ecology？

傷つきやすいものを気遣い、喜びと真心をもって、被造物と貧しい人や見捨てられた人を思いやり、喜びと寛大な献身と開かれた心で愛に生き、神と、他者と、自然と、自分自身との見事な調和のうちに、自然への思いやり、貧しい人々のための正義、社会への積極的関与、そして内的な平和の間の結びつきの分かちがたさを示した聖人、神秘家、巡礼者アッシジの聖フランシスコを最高の模範と仰ぐ生き方。

数学や生物学の言語では言い表せない実在領域への開きを求め、わたしたちを人間であることの核心へと、他の被造物すべてを創造主への賛美へと連れていく道しるべ。

存在するものすべてへの知的理解や採算をはるかに超える気遣いのうちに、畏敬と驚嘆の念をもって自然や環境に向かい、世界とのかかわりにおいて友愛や美のことは絶やさず、飽くことなく当面の必要を満たそうとする支配者、消費者、冷酷な搾取者の態度と決別し、現実を利用や支配の単なる客体におとしめることを拒絶する貧しさと簡素さを、自らの行動を決定づける選択の証し

とする、自身を取り巻く**世界に対する応答**。

創造主という考えを固く拒絶したり無意味なものともみなしたりする人、人類の十全な発展に対して宗教がなしうる豊かな貢献を不合理なものとして捨て去る人、宗教をただかサブカルチャーの一つとしてしか認めない人が現に存在する中で、科学と宗教がそれぞれに独自のアプローチで現実を理解しつつ、双方に実りをもたらす中身の濃い対話に入ることを可能にする**信仰者たちの確信**。

神の道具となって、事物の中に神がお刻みになった可能性を引き出す使命を与えられた人間の、園を保全する（「守る」）ばかりでなく、より実り豊かなものとする（「耕す」）労働の価値を認めつつ、被造世界を賢慮あるしかたで発展させる（「造られたこの世界の調和を固く保つ」）被造世界の**ケアの最良の道**。

危機の人的側面と社会的側面を明確に取り上げ、密接に関係し合っている地球規模の危機のあらゆる側面を考慮させ、また、この世界が無償で与えられ、他者と分かち合うべき贈り物であることとの自覚のうちに、効率性と生産性をただただ個人の利益のために調整する単なる功利的視点で現実を眺めず、わたしたちがいただいたこの世界は後続世代にも属するものゆえに、世代間の連帯は、任意の選択ではなく、むしろ正義の根本問題であると受け止めさせる、社会倫理を統一する中心原理である共通善の概念と不可分の、**広範な展望**。

自分の身の周りのことを何もかも粗雑に扱うよう急かされながら、猛烈な活動へと駆り立て多忙さを感じさせる深刻な不安定さのただ中で、被造界との落ち着いた調和を回復するために時間をかけるよう、わたしたちのライフスタイルや理想について省みるよう、そして、わたしたちの間に住まわれ、わたしたちを包んでいてくださる創造主を観想するよう促しながら、人生についてのより深い理解と、驚く力を伴う調和あるライフスタイルを涵養する**心の平安の保持・強化**。

消費の肥大化によってあらゆる形態のいのちが虐げられる世界にあって、優しいことばをかけ、ほほえみ、平和と友情を示すささやかな行いのあらゆる機会を逃さず、暴力や搾取や利己主義の論理と決別する日常の飾らない言動を積み重ねる、**愛の小さき道の実践**。

いのちを活かす (ecology) 自然環境 (environmental) の危機は、いのちを活かす (ecology) 経済 (economic)・社会 (social)・文化 (cultural)・人格形成 (human) の不全を含意しており、自然環境の保全はそれら不全の解消・回復なしには不可能である。

### 3. 「サルバトーレ（リノ）・フィジケラ大司教 に宛てた、2025年聖年のための書簡」より抜粋

もしわたしたちが全世界に広がる同胞意識を取り戻すことができれば、そして何百万人もの男女、若者、子どもたちが人間らしく尊厳をもって生きることが妨げている、蔓延する貧困の悲劇に目を閉ざさなければ、これはすべて可能でしょう。とくに、自分の土地を離れることを余儀なくされている多くの難民のことを考えています。聖書の命令に従って、すべての人が大地の実りを手にすることができるように回復する「安息の年（聖年）」への準備のこの時期に、どうか貧しい人々の声が聞き届けられますように。「安息の年に畑に生じたものはあなたたちの食物となる。あなたをはじめ、あなたの男女の奴隷、雇い人やあなたのもとに宿っている滞在者、更にはあなたの家畜や野生の動物のために、地の産物はすべて食物となる」（レビ 25・6-7）。

したがって、わたしたちを回心へと導く聖年の霊的側面は、社会生活のこうした基本的側面と結びついて、首尾一貫した全体を形成しなければなりません。わたしたちは皆、自分は巡礼者であり、この地を耕し、世話するように主が連れてこられたのだと感じています（創世記 2・15 参照）。その道中、被造界の美を観想し、わたしたちの共通の家を世話することを、わたしたちは怠ってはなりません。来るべき聖年も、このような意図をもって祝われ、生きられるよう願っています。実際、多くの若者や青少年を含む多くの人々が、被造界へのケアは神への信仰と神のみ旨への従順さの本質的な表現であることを理解しています。

慣例に従って、後日発行される大勅書には、2025年の聖年を祝うために必要な指示が含まれます。この準備の時期に、聖年の行事に先立つ 2024 年を、偉大な祈りの「響き合い」に捧げることができると思うとうれしいかぎりです。

何よりもまず、 主の前に立ち、主の声を聴き、主を崇めるという願いを回復する祈り。 わたしたちに対する神の愛からの多くのたまものに感謝し、創造のわざをたたえるために、被造界を尊重し、それを保護するために具体的かつ責任ある行動をとることを約束する祈り。 連帯し日々の糧を分かち合うことに還元される、「心も思いも一つにした」（使徒言行録 4・32 参照）声としての祈り。 この世のすべての人が唯一の神に向かい、心の奥底にあるものを神に表現できるようにするための祈り。 聖性への大通りとして、わたしたちを行動において観想を生きるよう導く祈り。

言い換えれば、熱心に祈る一年とし、豊かな恵みを受け取るために心を開き、イエスが教えてくれた「**主の祈り**」を弟子たち一人ひとりの人生のプログラムとするのです。